生徒が主体的に取り組む英語科授業改善の方策

－授業分析と小中連携の視点を通して－

齊藤貴之（M18EP006）

1．研究テーマについて

本研究は，昨年度研究「中学校英語科における授業改善への提言-小中連携の視点・授業分析を通して-」で明らかになった小学校外国語科授業の特徴と，中学校に応用できる授業改善の視点をもとに中学校で授業実践を行い，詳細な授業分析を通して，その成果や課題点を提示することを目的とする。

2．昨年度の研究について

昨年度の研究実践から，今年度の研究に至るまでの経緯について以下に述べる。

(1) 研究の動機～中学校現場での実感から

小・中学校の新学習指導要領が平成 29 年 3 月に公示されて以降，中学校英語科においては，扱う語彙や文法の増加，4 技能が 5 領域に分けられることが話題になるなど英語教育は今現在，大きな変革の中にある。

しかしながら現場における中学校の英語科授業の実態は多くの課題を抱えている。積極的に英語を学ぼう・使おうという姿勢を育てるコミュニケーション主体の授業を仕組みたいと考えながらも，その一方で中学生の英語学習に対する意欲の低下や，小学校の英語授業との連携の難しさを感じながら，授業づくりに苦戦している英語教師も多いはずである。こうした現状打開のための手がかりを見つけたいという思いが，今回の研究を始めた最初の大きな動機となっている。

(2)小学校における参与観察から

こうした自身の問題意識への答えを求める手段として，昨年度はあえて中学校現場を離れて小学校で実習することを選択した。

当初は小学校の英語授業の実状に対する懸念もあったが，実際に授業を観察する中で意欲的に英語を話そうとする児童の姿や，小学校教師の個への関わり方の細やかさなど，中学校側の人間として学ぶべき点が多いことに気づいた。そこで，小学校の授業観察において主観で感じた優れた点を詳細に授業分析することで，その秘密を明らかにし，中学校における授業改善に生かすことができないかと考えた。

(3)授業分析法について

授業分析をするために，6 年生 2 クラスの授業を対象に，1 学期末に A 教諭 4 回，B 教諭 3 回，計 7 回の授業のプロトコル（授業における教師・児童の逐語録）を作成した。

授業分析法については，文献調査を通して Moskowitz(1971)の Flint と呼ばれる方法をベースに授業分析を進めることにした。吉田(1986)によると，こうした分析は発話等を 3 秒刻みで分類していくのが正式な分析手順だが，今回は 1 回の発話に対して分析コードを当てはめるという簡易的な方法で行なった。また，実際にプロトコルにあてはめる中で，コード分類にうまく当てはまらない発話もあったことから， Flint をベースに項目の修正や付け足しを行い，独自の授業分析コード表を以下のように設定した。

表 1・Flint をベースにした分析コード

教師の発話	
1	児童のさまざまな感情 発言に受容的に対処する。あいづちも含む。
2	児童の発言やがんばりをほめる。自信をあたえはげます。元気づける。
3	児童（やALT）の発言を要約 受容し，次の行動や質問に活用する。
3a	児童（やALT）の発言をそのまま繰り返す。聞き返す。
4	教師から児童へ質問する。あいさつ等のやりとり。
4a	同意を求める。意思や理解を確認する。
5	説明や講義をする。情報や答えを与える。
5a	児童の誤りを批判することなく訂正する。

5b	児童の質問に対して応答する。
5c	ヒントを与える。デモを見せる・聞かせる。気づかせる。
6	指示を出す。指名する。
6a	文型練習。発音練習等の見本・指示を与える。リピートさせる。
6b	注意を引き付ける。注目させる。進行のコールをする。あおる。
6c	教師同士での応答。進行の確認。
7	児童を叱る。注意する。
児童・生徒の発話	
8	質問に対する応答（形にはまった簡単なもの，あいづち含む）。
8a	一斉練習・発音練習・定型パターン（あいさつ等）。
9	自発的な発言。発表。工夫した応答。つぶやき。気づき。
9a	教師・仲間に対して質問する。
10	沈黙または混乱。
10a	ビデオ等，視聴覚教材やデモの聞き取り。
10b	記録不能状態（一斉活動，作業，移動，準備等）。
11	熱心のあまり，多数の児童がそれぞれ発言する状態。
12	笑い。

(4)実際の分析結果と小中比較

実際に上記のコードをあてはめた授業の分析結果は以下の通りである。本稿では 7 回の授業を平均化した数値を掲載する。

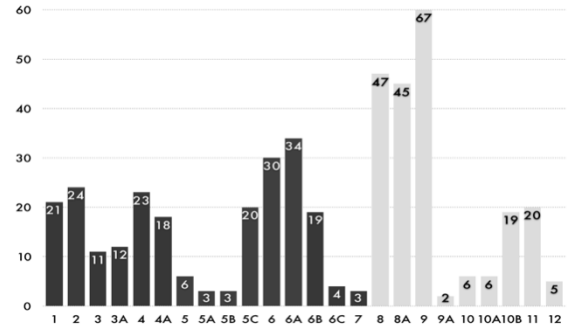

図 1・小学校の授業分析結果（7 回の平均）

また，このデータの特徴を明らかにするための比較が必要だと考え，県内公立中学校にも授業観察を依頼し，同様のプロトコル作成と授業分析を行った。

山梨県内公立 B 中学校
英語科授業⇒3 つの授業を分析
（3 年 C 教諭・2 年 D 教諭・1 年 E 教諭）

これらの分析結果の比較から，多くの興味深い点が出てきた。まず教師の発話に関しては，小学校では「1・児童（生徒）のさまざまな感情，発言に受容的に対処する」「2・児童（生徒）の発言やがんばりをほめる，自信をあたえ，励ます。元気づける」といった項目が中学校より割合が高く，小学校の授業の中に受容的な態度やほめる行為が多いことがわかった。一方，中学校では，文法など指導事項が増えることから「5・説明や講義をする。情報や答えを与える」が多いことがわかった。また，児童・生徒の発話に目を向けると，小学校では「9・(児童の）自発的な発言。発表。工夫した応答。つぶやき，気づき」などが高く，積極的に発話する児童の様子がうかがえた。一方，中学校では「8a・一斉練習，発音練習，定型パターン」の割合が高く，練習的な発話については時間が確保されているが，考えを述べたり，自己表現的な発話をしたりする場面が不足している様子が見られた。

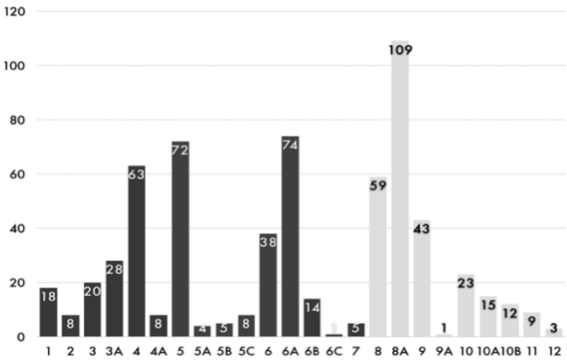

図 2・中学校の授業分析結果（3 回の平均）

(5)明らかになったこと

こうした詳細なデータ比較とともに，授業者へのインタビュー調査も行い，以下のことが明らかとなった。

- 小学校における児童の発話の多さ。また子ども・教師ともに小学校の方が英語で発話する割合が高いこと。
- Referential Question（指示発問）を増やすことで，充実したやりとりを作ろうとしていること。
- ほめる，はげます等の言葉かけが多く，その意図は多岐にわたること。
- 教師自身がコミュニケーションの手本であることを意識して指導していること。

・ コミュニケーションに対しての考え，指導が一貫していること。

こうした教師の姿勢や取り組みが，児童の英語を使ったコミュニケーションに対する興味や意欲を高め，発話の多さにつながっていると考察し，昨年度の研究をまとめた。

3．今年度の研究計画について

今年度は昨年度研究で明らかになった小学校外国語科授業の特徴と，中学校に応用できる授業改善の視点をもとに中学校で授業実践を行い，その成果や課題点を検証した。

対象校…山梨県内公立 B 中学校
実習校における授業実践
中学 2 年生 3 クラス　中学 1 年生 1 クラス

授業実践の検証方法として昨年度研究で実施した授業分析法を用いた。もしも授業分析のグラフに現れる形が，昨年度の小学校で見られた形と近いものを示すことができれば，生徒が自発的に英語を話したり，課題に対して積極的に考えたりする主体的な授業を作り出せたことになると想定した。また，授業の傾向を小・中間で近づけることにより，生徒にとって小・中の授業のギャップを小さくした授業が展開でき，カリキュラム以外の小中連携の可能性を提供できると考えた。

4．実際の授業実践とその考察①

(1)授業実践とその分析結果

研究実践の取り掛かりとして，6 月の段階で自身の授業をこれまでと同様の方法でプロトコル分析した。自身の授業の傾向をつかむとともに，授業改善の具体的な手がかりがつかめることを期待した。

調査日…6 月 13 日
対象学級…2 年 2 組（35 人）
※ALT とのチームティーチング
授業者…指導歴 18 年目の中堅教員
ALT…30 代男性，指導歴は豊富である

なお，授業内容は今後のベースになることを考え，教科書内容指導をもとにした内容とした。

当日のプラン

① あいさつ，スモールトーク
② グループでの宿題確認，答え合わせ
③ 新出文法(have to)の導入・解説・練習
④ ALT のスピーチ聞き取り
⑤ 教科書本文導入・確認・音読

この授業内容についてプロトコル分析をした結果得ることができたデータを昨年度実施の中学校における分析結果と比較すると，いくつかの違いが見えてきた。

(2) 生徒の発話に関する比較

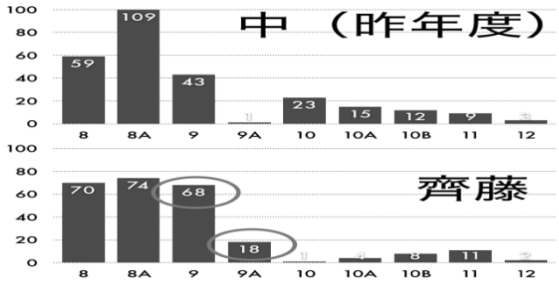

図 3・生徒の発話の比較

生徒の発話にあたる部分を比較すると図 3 のようになる。昨年度の中学校における調査結果と比べて番号 8・8A・9 が比較的均等な割合になっていることがわかる。これは昨年度の小学校調査結果に近い形である。また「9・(児童の) 自発的な発言。発表。工夫した応答。つぶやき，気づき」や「9A・教師・仲間に対して質問する」の割合が高いことからも授業の中で生徒が活発に話している様子がわかる。

(3) 教師の発話に関する比較

教師の発話に当たる部分を比較すると，昨年度の中学校における調査結果と比べて「1・生徒のさまざまな感情，発言に受容的に対処する」の割合が高くなっている。昨年度の研究で明らかになったことをもとに，筆者自身生徒の発話に対する受容的な姿勢や褒め言葉については意識して授業をしたつもりである。そうした意識が確実に数値となって現れている。また，そうした姿勢が前述の番号 9 などの数値の高さにもつながったと思われる。

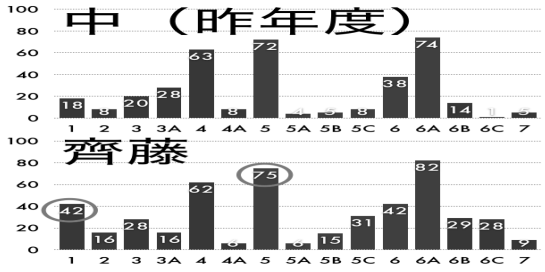

図 4・教師の発話の比較

一方で課題も明確に出てきた。昨年度の研究でも中学校側の課題として出ていた「5・説明や講義をする」の数値が，筆者自身，その課題については意識していたつもりにもかかわらず昨年度と同等に高くなってしまった。中学校の学習において文法を指導することは必須であり，説明することがそのまま悪いこととして捉えられるものではないが，長年の経験も相まって日本語での説明の時間が長くなってしまうという自身の傾向・課題が明らかになった。

(4)発話比率の比較

説明が多くなってしまう課題は，授業における教師と生徒・英語と日本語の発話比率にも影響している。今回の授業における教師と生徒の発話比率を調べると，「教師…66%，生徒…34%」と教師の発話比率がかなり高くなっている。またその教師発話のうち約 4 割を教師による説明過多が原因で日本語による発話が占めている。

(5)自分自身の分析を経て見えてきたこと

こうした自身の分析を経てわかったことについてまとめてみる。

- 個を意識した言葉かけ，つぶやきを拾うことを意識することで，生徒の発言してみようという意識を高めることはできた。
- 説明が多くなってしまう癖はなかなか治らない。説明する＝悪ではないが，さらにコンパクト化して生徒の発話機会を増やすことはできないか。
- 生徒の積極性は高いが，自然に英語を使ってみる段階には至っていない。抵抗感なく英語を自然に口にできるように，英語でのやりとりに関する日常的な指導を考えていく必要がある。

こうした課題をどのように捉え，解決を図るかが，今年度の研究の大きな核となった。

5. 課題解決のための具体的な方策①

課題解決のためにどのような切り口で授業改善を行うべきか。改めて昨年度の研究で明らかになった小学校における優れた点を振り返る中で，まず「Referential Question（指示発問）を増やすことで，充実したやりとりを作ろうとしている」という点に着目した。

その前に Referential Question という言葉の定義について確認したい。小池(1994)によると，Referential Question（指示質問）は，「質問者が答えを知っていない質問」のことであり，反対に「質問者が答えを知っている質問」として Display Question（提示質問）がある。昨年の研究において小学校教師の質問に関する発話の部分を再分析すると，この Referential Question の割合が高く，児童・生徒の生活や興味に結びつけた質問，学習内容から発展させて個人のことをたずねる質問を多くすることで，やりとりを広げようという意図が見られた。そこでこの Referential Question を用いつつ教師と生徒，生徒相互のやりとりを深める手立てとして Small Talk の活用の可能性に着目した。

(1) Small Talk の定義

Small Talk の定義について確認したい。文部科学省(2017)の小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックによると，「Small Talk とは，高学年新教材で設定されている活動である。2 時間に 1 回程度，帯活動で，あるテーマのもと，指導者のまとまった話を聞いたり，ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。また，5 年生は指導者の話を聞くことを中心に，6 年生はペアで伝え合うことを中心に行う。」(p.130)とある。これまでも中学校の授業内でペアによるや

りとりの練習は適宜取り入れてきたが，中学校授業でもこの Small Talk により近い形でやりとりの練習を実践していくことで課題となっている英語を発することへの抵抗感を減らし，即興的なやりとりの充実につなげようと考えた。

(2)Small Talk の実際

実際の Small Talk の様子を紹介する。（生徒の文法や語句の誤りもそのままで掲載する。）

トピック:夏休み中の思い出(8/29 授業) 実施例 1

生徒 A: How was your summer vacation?
生徒 B: I am very excite…
How was your summer vacation?
生徒 A: I was…I was…, あ, I went to Tokyo… with my family.
生徒 B: あー，おれはねー…
教師: そこ英語で返して！
生徒 B: Oh, very good!

このように，慣れないと日本語ですぐ生徒は返してしまい，英語だけでやりとりすることは容易ではない。

トピック:夏休み中の思い出(8/29 授業) 実施例 2

生徒 C: How was your summer vacation?
生徒 D: It was fun.
生徒 C: Where did you go?
生徒 D: I went to Kamakura.
生徒 C: What did you do there?
生徒 D: I saw Kamakura Daibutsu.

一見スムーズに会話が成り立っているように見えるが，事前に黒板を使いながら指導した例文をそのままなぞるだけの一問一答のようになってしまい，会話が広がらずすぐに終わってしまう。こうした初期段階から，より Small Talk の質を高めるために，本田(2019)による以下のポイントを意識しながら継続した指導を続けていった。

Small Talk の質を高めるために必要な指導
1. 相手の質問に対し，自発的に情報を加えて返す。
2. 相手が言ったことに関連する質問を行う。
3. 基本的な会話技術や会話表現を使用する。
4. どんな話題（少なくとも身近な話題）でも何かしら言えるネタをもっている。

まだ発展途上ではあるが，以下の生徒同士のやりとりを見れば，指導を経て少しずつお互いの会話に慣れている様子がわかる。

トピック:将来の夢(10/7 授業) 実施例

生徒 E: What do you want to be in the future?
生徒 F: I want to be a soccer player.
生徒 E: Soccer player?
生徒 F: Yes…
生徒 E: Why?
生徒 F: Because…soccer player is cool.
生徒 E: Ah, cool…me, too.
生徒 F: What do you want to be in the future?
生徒 E: I want to be a youtuber.
生徒 F: Oh, you want to be a youtuber?
生徒 E: Because…I want to be a youtuber…
… a lot of money? … I use…
…a car, and train… and big house!

相づち，繰り返し，質問を返すなどの指導を入れることで自然な会話に近づけることができた。

また，実際に指導する中で，教師がどのようにトピックを提供するかの重要性も実感した。以下，2 つの例を紹介する。

トピック:明日どこへ行く(6/13 授業) 導入部

教師: Tomorrow…what are you going to do tomorrow?
生徒 A: 市総体？
教師: Yes, yes, yes, where are you going to go tomorrow?
生徒 B: I’m going to…
教師: I’m going to… go to…?
生徒: （緑ヶ丘！）（小瀬！）
教師: and what will you do there?
生徒 B: そこで何をするか？
教師: Ah, yes!
生徒 C: game!
生徒: (play game!) (tournament)
教師: Oh, what tournament?

ここでは習ったばかりの表現(be going to)に身近な話題（翌日に迫った総合体育大会）をトピックに絡めたので，生徒の反応が良く，スムーズにこのあとのやりとりに入ることができた。他の例も見てみる。

トピック:愛とお金どっちが大事？(2/13 授業) 導入部

ALT: Tomorrow is valentine day…
教師: Very romantic day… you know, love is the most important thing!
生徒: （笑）
ALT: No! I like money!
生徒: （え～！）

教師: What? you think money is more important than love?
ALT: Yes, money is more important than love.
生徒A: なんかものすごいこと言ってる（笑）
教師: Oh, no… what do you think? do you think so?
生徒B: うんうん, money, money…
教師: Do you think money is more important than love? which is more important? love or money?

バレンタインデー直前に，ALT がユーモアを交えて受け答えしたことから「愛とお金どっちが大事か」の話題で生徒たちは一気に盛り上がり，このあとのやりとりにつながった。このことから，タイムリーな話題や，その場の雰囲気によって即興的にトピックをつくることも生徒が話したいと思える状況を作ることには有効だと実感した。なおここでも習ったばかりの表現である more important を用いている。なるべく習ったばかりの表現を活用することで，Small Talk を通じて新出文法定着のための活動の保障もできた。

6. 課題解決のための具体的な方策②

課題解決のためにどのような切り口で授業改善を行うべきかの 2 つ目の方策として，単元設計の工夫を通して発展的な言語活動の充実をはかることを挙げたい。これを通して先に挙げた説明等が多くなってしまう課題を解決し，生徒が発話できる機会を増やすことを目指した。

これまでの英語授業では，例えば教科書見開きに本文と新出文法があった場合，最初の時間を新出文法の指導に，次の時間を教科書本文の読解にというパターンがよく見られる。この 1 つの授業パートの設計を変えてみることに挑戦してみた。具体的には第 1 時に新出文法の確認と練習に加えて，教科書本文の導入と音読練習まで実施する。第 2 時には必要に応じて前時の復習を入れながら，教科書本文の発展活動を入れる。こうすることで文法指導がコンパクトになるとともに，教科書本文に触れる機会を増やすことができる。なお，文法指導のコンパクト化については，教科書の指導書についてくるプリント教材を板書のかわりとして活用することで時短を実現した。

(1)発展活動の実際例①

1 年生授業 9 月実施
(Sunshine 1 Program5 国際フードフェスティバルより)
毎ページを 2 時間構成で 1 時間目を新出文法と本文確認，2 時間目を復習と役割演技
→最終ページでは，イラストをもとに登場人物の家族を紹介するリテリング(retelling)を実施。

この単元でははじめて He や She が登場するが，ページごとに十分な役割演技の練習ができたことで最後のまとめとして初めて実施するリテリング活動にも生徒は意欲的に取り組むことができた。

(2)発展活動の実際例②-1

2 年生授業 1 月実施
(Sunshine 2 Program9 A Video Project より)
グループごとに協力し合い，教科書を使わずに本文再生または同様のテーマについて自由に班ごとに配られたホワイトボードに記入する。

教科書の登場人物が，ソフトテニスについて特徴や歴史を説明する内容を，10 分間の制限時間内に，活動中教科書を見てはいけないという条件で実施した。ここで 2 つの班の書いた文を紹介する。（文法等の誤りには波線）

6 班
Soft tennis ball is lighter and softer than normal tennis ball. Soft tennis invent in Japan many years ago. Soft tennis racket use only one face. But normal tennis racket use both faces. Japanese junior high schools usually have soft tennis.

→意欲的に書いていたが，文法上の誤りなどが多く見受けられた。

3 班
Soft tennis ball is as size as normal tennis ball.

→活動をリードできる生徒がいなかったこともあり 1 文しか書けず，語句の誤りもあった。

(3)発展活動の実際例②-2

しかし，こうした活動を続けることで変容が見られるようになってきた。以下は，教科書の登場人物が，学校で行われる合唱コンクー

ルについて説明する内容について先ほどと同じ 2 つの班が書いた文である。

6 班
We are going to tell you about our chorus contest. We sang the song "*Kimitomitaumi*（注・曲名）". This song has three parts. This song was difficult for us. We practiced it very hard. But we didn't win the first prize. But our classmates practiced very hard. We were very happy.

前回の活動をもとに教科書の内容をしっかり再生できたうえに，自分たちの合唱コンクールの内容についての表現へと応用できた。

3 班
We are going to tell you about the chorus contest. We sang the song "*Kimitomitaumi*". I practiced hard with my classmate every morning. All the classes practiced very hard for it. Finally we didin't win. The final day was exciting. Y was the conductor. He was good. We sang to N's piano.

前回の活動で 1 文しか書けなかった 3 班は，これだけの文を協力して書いてきた。各自が教科書の活用を理解し，意識して前時から教科書を読むことができた成果だと考える。また下線部の Y と N はこの学級の指揮者と伴奏者の名前が入るが，そのことについて付け足して書きたくて辞書を使って表現を調べようという意欲的な姿も見ることができた。

このように，さまざまな方法でコンパクトな授業構成を目指しながら，発展的な活動を増やすことによって生徒が積極的に英語を用いた練習に取り組んだり，グループで協力する場面を日常的に増やすことができた。

7．実際の授業実践とその考察②

(1)授業実践とその分析結果

これまでのさまざまな取り組みをふまえた授業実践の効果を検証するために，6 月と同様に自身の授業をプロトコル分析して，取り組みの効果が客観的な数値としてどのように表れるかを見てみる。この授業の大まかな内容は以下の通りである。

調査日…12 月 5 日
対象学級…1 年 4 組（29 人）

※ALT とのチームティーチング
当日のプラン
① あいさつ
② Small Talk（他者紹介）
③ 教科書本文の復習
④ 教科書本文の発展活動

この日は，教科書本文をペアで役割演技として覚えることに加えて，最後に 1 行ずつ登場人物のセリフを考えて加えるという発展活動を行なった。教科書の話は，登場人物ウッド先生が，折り鶴を見て感動し，日本人女性に作ってほしいとお願いする場面である。

例 1 作った女性: What animal do you want?
ウッド先生: I want a lion.
例 2 作った女性: How many do you want?
ウッド先生: I want 100 please.

など，生徒は既習事項を生かしつつ，さまざまなアイデアを出しながら，役割演技の練習に取り組んでいた。

この授業内容についてプロトコル分析をした結果得ることができたデータを 6 月実施の授業と比較してみると，授業で行ったいくつか試みの成果が見えてくる。

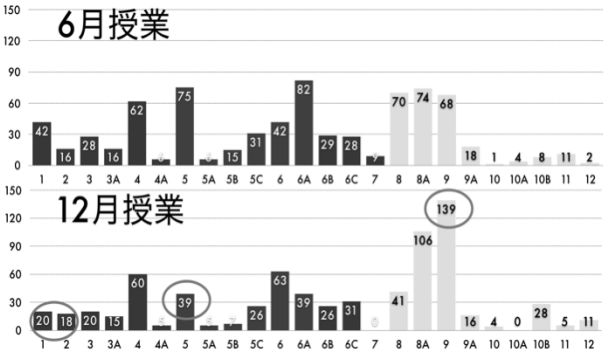

図 5・6 月授業と 12 月授業の分析結果比較

2 つを比べると 12 月授業における「9・自発的な発言。発表。工夫した応答。つぶやき，気づき」の割合が 2 倍以上高くなっていることがわかる。教師主導ではなく，生徒たちが主体となる活動を適切に仕組むことによって自発的な発話の数値を高めることができた。もちろん，ペアやグループの活動が増えれば，こうした数値が高くなるのは当然のことではあるが，それゆえにこの数値の高さが，改めて生徒主体の活動の大切さを示していると言えるだ

ろう。

また，あわせて 6 月授業の課題となっていた「5・説明や講義をする」の数値を減らすことにも成功した。ただし，この回は新出事項の学習がない回なので，単純比較はできないことを断っておきたい。なお，番号 1・2 など，受容的な発話に関する数値が低くなっているが，これはプロトコルで起こせない机間巡視の時間が多くなっているためであり，前回と同等かそれ以上に実際には生徒個々と関わることができたと考えている。

8. まとめにかえて

本研究を通して，小学校の授業観察から得た知見をもとに，中学校における授業改善の方策をいくつか見つけるとともに，その意義を授業分析の数値によって示すことができた。昨年度の研究では，まとめとして「中学校英語科における授業改善への提言」を述べた。今年度の研究を通してこの提言の正当性を改めて実感したことから，本研究のまとめにかえて以下を再掲したい。なお「→」以降は，今年度研究を経て筆者が確認した事項の付け足しである。

- 生徒の自発的な発話が引き出せる授業展開を目指そう（文法指導も本文読解もコミュニケーションにつなげるものという意識をしよう）→単元やパートごとに生徒主体となる言語活動を設定する必要性を再認識。
- 説明が必要な場面の指導のありかたを見直そう（練習や活動との時間配分を考える）→文法指導に 1 時間使う考え方から脱却し，発展活動の充実をしよう。
- Referential Question（指示発問）を増やすことで，生徒の発話を引き出し，やりとりを充実させよう→自分と関係することを Small Talk へ結びつけることが有効。
- ほめる，はげます等，個を意識した言葉かけを増やそう。指示だけでなく，あいづち・反応など，教師が英語でコミュニケーションをとる良き手本となろう→教師の意識だけでも十分に変わる。
- 英語を通して児童・生徒に何ができるようになってほしいのか（相手意識をもったコミュニケーションなど），小・中で，めざすべき姿の共有をしよう→分析コード 9 が高くなるような授業構成をお互いに目指していこう。

9. おわりに

小学校と中学校，それぞれの実習を通じて授業分析という手法を軸にさまざまなことを明らかにするとともに，何よりも自分自身の授業実践の成果と課題を明らかにすることができたと実感している。

今後は Small Talk や発展的な活動を充実させた授業の大切さを示すことはできたと思うが，それが学習事項の定着にどのような因果関係があるかなど，まだまだ明らかにしたいことは多く，興味は尽きない。今後も本研究を足がかりに個人研究に邁進していきたい。本研究が筆者自身だけでなく，現状に対して悩みや課題意識を抱えている英語教師に対して何らかの指針になればと願っている。

引用文献

Moskowitz, G. (1971). Interaction Analysis. *Foreign Language Annals* 5:211-221.

本多敏行.(2019).『スモールトークの効果と留意点』, 英語教育(68)10-11, 大修館書店

小池生夫（監）.(1994). 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』, 182-183, 大修館書店

文部科学省.(2017).『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック実践篇』, 130

文部科学省.(2017).『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』, 7-9.

文部科学省.(2017).『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』, 12.

齊藤貴之.(2019). 『平成 30 年度教育実践研究報告書』, 129-136, 山梨大学教育学研究科教育実践創成専攻

佐野正之. (2000).『アクション・リサーチのすすめ』, 194-196, 大修館書店

吉田一衛.(1986) .「第 4 章 2 節規範的分析法の解説と分析例示」金田道和 (編)『英語の授業分析』, 185-204, 大修館書店